

〈古い〉を受け入れる昔男

―伊勢物語七七―九五段に見る現実との折り合い―

田口 尚幸 (国語教育講座)

一 序

本稿は、伊勢物語を配列順に読むというシリーズの五本目にあたる。一本目は一―二〇段、二本目は二一―三七段、三本目は三八―四八段、四本目は四九―七六段をとりあげた。五本目では七七―九五段をとりあげる。

伊勢物語を配列順に通して読むという作業は、予想以上に骨の折れる作業だった。伊勢物語の読者でとばし読みの衝動に駆られなかった者はいないだろう。それほど伊勢物語には群小章段が多く、それらを主要章段と絡ませることは難しい。群小章段を後補・付加と位置づけて物語世界の中心から追放してしまう成立論的解釈が広く支持されたのも、正直な話、そつした背景によるものだろう。しかし、成立論的解釈にはもはや従い得ないという結論を私は得ている。群小章段だろうと、その前後の構成を丹念に読みこみ、主要章段とも絡ませていく。その読みの試みは成果をあげてきたと自負している。

今回とりあげる七七―九五段では、八八―九五段が群小章段と言える。群小章段の多さという点では二本目と三本目が難しかったが、今回もこの八八―九五段は難関となるだろう。もちろん、七七―八七段とて組しやすいわけではない。たとえば一本目の一―二〇段には東下り章段群が含まれていたが、この有名な章段群にはあまり紙面を割いていない。既に先行研究も多く、新見を出しにくかったからだ。七七―八七段では、惟喬関係章段群を中心に、政治的敗者との交情を描いた有名な章段が群をなしている。多くの論文があるところだけに、新見を述べることは容易ではあるまい。ここを翁関係の七七―八二段と宮仕え関係の八三―八七段に二分し、それぞれに新見を盛りこみつつ、後続の八八―九五段の群小章段に繋げていきたい。

一―二〇段の一本目に入る前、私は、「全体を編集した者の意図」なるものをさぐろうとしていた。すべての章段を繋いで繋ぎまくり、このシリーズを完結させることが、全体的編集者の意図を証明することになるはずだ、とも考えて

いた。換言すれば、全体的編集者の意図がなければ挫折する、と考えていたのだ。けれども、本格的にシリーズにとりかかるとすぐ、私は繋ぐことの難しさを痛感した。そして、もし仮に全体的編集者がいてもそこまで考えてないだろう、と思えるほどの深読みや関連づけをも行なった。全体的編集者は私の視野から消えてしまったのだ。どう読めるか。このシリーズは、私が読みを仕掛けて創り出す田口本伊勢物語と言える。文献学的に見てもどこまでが全体的編集者の仕事なのか確定できるはずはないのだから、全体的編集者の仕事という概念は考えない方が無難だ。テクスト論という言葉をこれまで意図的に使わなかった私だが、シリーズ五本目に入り、そろそろ使ってもいい頃かと思っている。

二 翁の仮面

伊勢物語は一代記的体裁をとっている。章段が進むほどに昔男は年を重ね、成長していく。少なくとも私はそう読んできた。一―二〇段では、原体験とその後の曲折を経て、共感すべき相手と進むべき方向性を知る。二一―三七段では、つづく不運と失敗に自らを見失いながらも、恥を知った後は凛然とした強さをとりもどす。三八―四八段では、角のとれた博愛主義と、広く連帯しようとする孤高からの脱却を見せる。四九―七六段では、はじめのうちこそだれた霧囲気をひきずるものの、仮死と再生の五九段を境にシリアス路線にもどってくる。そして、七七段からは翁としての性格を見せる。

まず、前回の最末尾であり、今回との繋ぎ目にあたる七六段の本文を示す。実は、翁はここから現れているからだ。

昔、二条の後の、まだ東宮の御息所と申しける時、氏神にまうで給ひけるに、近衛衛にさぶらひける翁、人々の禄たまはるついでに、御車よりたまはりて、よみてたてまつりける。

大原や小塩の山も今日こそは神代のことと思ひいづらめ
とて、心にもかなしと思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし。

なぜ翁なのか。前稿では、時間の経過を知らしめる、言祝ぐ役割を担う、章段群内のタイムスリップの揺り戻しを印象づける、といった理由をあげておいた。全一・二五章段の一代記の七六段目なら翁という呼称も不思議でないし、内容的にも昔日を回想するかたちになっている。また、翁とは、単純に「老人」をさすだけでなく、卑賤の道化師のようにふるまい、言祝ぐ「役柄」をも意味するから、その点でも、七六段における昔男はまさに翁と言える。注目すべきはこの「役柄」だ。七六段での昔男のふるまいは、「役柄」としての翁の仮面をつけてのものだ。かつての昔男は、三・六段では、藤原氏の大切な持駒だった高子に果敢に求愛し、六五段では、帝の寵愛を受けている高子に執拗につきまとった。現実世界の権威をもものもしなかったわけだが、七六段では身分差を受け入れ、藤原氏の氏神である大原野神社への行啓を言祝いでいる。あつけないほどあつさり現実を受け入れているかのようだ。ただし、年をとって少しは角がとれたとしても、なんの臆面もなくふるまえる場面ではないだろう。翁の仮面で本当の自分を隠しているからこそ、このようにふるまえるのではないか。歌後部にも注目したい。

心にもかなしと思ひけむ、いかに思ひけむ、知らずかし。
わざとらしい。「かなし」と思う気持ちわざとらしいで覆い隠している、と読める。この種の物言いは、七六段以前では、やはり翁の回想である四〇段の歌後部にある。

昔の若人はさるすける物思ひをなむしける。今の翁まさにしなむや。

七六段にせよ、四〇段にせよ、翁の仮面が、このようになわざとらしいとぼけた台詞を可能にしているのだろう。伊勢物語の翁は、きわめて仮面性の強い「役柄」なのだ。

では、「役柄」としての翁の性格に特に注目して、七七・八二段の翁関係章段群を貫く問題を考えていこう。伊勢物語のなかで翁の呼称が使われるのは、前出の七六段と四〇段以外では、七七・七九・八一・八三・九七段で、ここに集中する。七八・八〇・八二段には翁の呼称がないものの、昔男の言動は翁的で、前後章段の翁の呼称が効いていると読める。七七段からは政治的敗者を励ますというテーマがでてきて、そこが七六段と異なるが、励ますにしても、道化師のようにふるまい、大げさに言祝ぐ。「役柄」としての翁を演じているのだ。また、枕草子の清少納言のように、悲しみを隠蔽し、明るさのみを強調しようとする姿勢も認められる。もし翁の仮面がなかったら、現実を直視し、湿っぽくなってしまふ。励ます相手にとっても、自分にとっても、惨めだ。だから、翁なのではないか。翁の仮面は敗者の惨めさを覆い隠すためのものなのだ。

七七・七八段は、藤原常行関係章段群と言える。常行もまた北家藤原氏だが、常行の父良相は、その兄良房の策謀にかかり、応天門の変の翌年死去する。良房によって権勢の圏外へと追いやられた家系。良房・基経父子のために敗者となった者には、昔男の在原氏、源融、惟喬親王らがいる。紀氏も入れていいだろう。昔男は彼らと連帯している。彼らに対するほどの親密さは見られないものの、常行にも親近感もったと思われる。七七段では、常行の妹多賀幾子の法事に参列した「右の馬頭なりける翁」が、「日はたがひながら」、法事の盛大さを称える歌を詠む。七八段は、常行が、その法事からの帰途に、出家隠棲する「山科の禪師の親王」の宮に立ち寄り、親王に親近感をおぼえて、風流に暮らす親王に庭石を贈る、という内容で、敬慕の情を「右の馬頭なりける人」に代作させる。両段において、昔男は、七七段では常行・多賀幾子兄妹のために、七八段ではこれから交友がはじまろうとする常行と山科禪師親王のために、わざとらしさすら感じられる歌を詠む。

山のみなうつりて今日にあふことは春の別れをとふとなるべし

あかねども岩にぞかふる色見えぬ心を見せむよしのなければ

まさに翁の歌。大げさなまでに、称え、敬慕する。暫間のようだ。翁の仮面をかぶり、演じることに徹しきっている。換言すれば、翁の仮面をかぶらなければ、詠める歌ではあるまい。「右の馬頭なりける翁」と明記される七七段では、「日はたがひながら」と、見まちがえたふりまで演じている。

七九・八〇段は、在原氏自身の話になる。まず縁遠い常行の七七・七八段から入り、七九・八〇段で自分自身、八一段と八二段以降で親交深い源融や惟喬親王へと範囲を広げていくかたちだ。七九段は、

昔、氏のなかに、親王うまれ給へりけり。御産屋に人々歌よみけり。御祖父方なりける翁のよめる。

わが門に千尋あるかげを植ゑつれば夏冬たれか隠れざるべき

これは貞教の親王。時の人、中將の子となむいひける。兄の中納言行平のむすめの腹なり。

と短い。つづく八〇段は、七九段と二つで一つと考えられる章段。八〇段も、

昔、衰へたる家に、藤の花植ゑたる人ありけり。三月のつごもりに、その日雨そは降るに、人のもとへ折りて奉らすとて、よめる。

ぬれつつぞしひて折りつる年のうちに春はいくかもあらじと思へばと短い。以前、こう書いたことがある。

七九段の在原氏は、一族の中に親王が生まれたことを喜んでいるが、その背

景に敵しい現実があるから喜んでるわけで、実際、将来を「夏冬」というすごしにくい季節にたとえている。ちなみに、直後の八〇段は、在原家とおぼしき家を「おとろへたる家」と表現している。七九段の「夏冬」の意味は直後の八〇段によって確認されるのであり、また、八〇段の「おとろへたる家」は、直前の七九段でかすかな希望が示されるがゆえに、両段の間に落差が生じ、その衰運の悲哀が増幅されるのである。七九段と八〇段は相補的に繋がっていると言える。

この読みはこれでいいと今でも思っている。

今回は、翁の〈役柄〉という視座から、さらなる相補性を付け加えよう。七九段は言祝ぎ、八〇段は幫間性を見せる、などと当たり前りことを述べて終わるつもりはない。七九段歌後部に注目する。この箇所は、たとえば渡辺実『新潮日本古典集成』が、

以下後人注。下品な注で事実ではあるまい。

と評している箇所だ。行平娘文子と清和天皇の間に生まれたはずの貞数親王は、文子の叔父業平との密通によってできた子だという。確かにゴシップ的で、渡辺評もわからないではない。が、ここはぜひ深読みしたい箇所だ。八〇段は藤原氏のご機嫌をとる獵官運動を描いているが、その直前にこの密通のゴシップがあったらどうだろう。皇統から離れた在原氏が、同族の姪と密通し、在原氏純血の親王を誕生させる。天皇は藤原氏の傀儡とも言うべき清和。高子を奪った相手でもある。イロゴノミの威力で政治に一矢報いる昔男。真偽のほどはともかく、この不敵な行為あるいは噂こそ、心まで折られていないたたかさをあらわす。八〇段のご機嫌とりの背景に、翁の仮面の下で舌をだし、うわべだけとりつくるう小気味よさを読みとることが出来る。多くの注釈書のように八〇段における昔男を敗者あつかいすることは可能だが、敗者のふりをしてると読んだ方がいいのではないか。七九・八〇段を含む一連の章段群は翁の〈役柄〉を演じる章段群であり、そうした仮面性をここで読むことはごく自然だ。七九段歌後部に注目し、七九・八〇段にしたたかな反骨精神まで読みとってみたい。私は、「ボロは着てても心はミヤビ」の負けない昔男を書いてきた。その意味でも、負けにはできない。いくら〈古い〉でも、譲れない一線はある。

八一段。昔男は、塩釜を模した源融邸で、融と彼のもとに集まった親王たち相手に、「板敷の下をはひありき」、かつての東下りを再現する。

塩釜にいつか来にけむ朝なぎに釣りする舟はここに寄らなむ
いつのまに塩釜に来たのか、ととぼけて見せるのも、翁ならではの演技だろう。

この行為によって、河原院にかつての東下りの負のイメージが流入する^(注10)。ただの園遊にはない含意性がでてくる。もちろん表層はカラツとした庭誉めだが、翁の仮面の奥の深層を読みみたい。七七・七八段も政治的敗者の章段にちがいがなかったが、縁遠い常行の章段だけに、負のイメージが意図的に描かれることはなかった。七九・八〇段はまさに当事者。思いきり負だ。そして、八一段。直前で昔男の負のイメージが描かれているだけに、昔男のもつ陰翳は読みとりやすくなっているのだろう。七七・七八段から比べると、徐々に物語が複雑玄妙になってきているというわけだ。

八二段は、業平の呪縛、とでも言おうか。この八二段は、六首中四首までが古今集で業平作・有常作とされる由緒正しい歌で構成されている。

第一部 古今業平歌・「また人の歌」

第二部 古今業平歌・古今有常歌

第三部 古今業平歌・後撰上野峯雄類歌（伊勢物語では有常作）

実際に、業平・有常が惟喬親王のもとで狩と酒と歌の遊びに興じたのだろう。当然、手を加える余地は制限され、伊勢物語としての自由度も制限される。残るは第一部第二首・第三部第二首だが、後者は伊勢物語では有常作とされており、古今業平歌・古今有常歌の延長線上に置かれている。問題は前者の「また人の歌」だ。以前に書いたが、この、

散ればこそいとど桜はめでたけれ憂き世になにか久しかるべき

という歌一首があることによって、全体が陰翳を帯びる。要となる歌だ。どういう経緯でこの歌が入り、どうして「また人の歌」になっているかについては深入りすまい。そういう成立論的な問題は、確実な答がない。どう読めるか、だ。おそらく、八二段の構造は、七九・八〇段や八一段とはちがう。七九・八一段は、昔男自身が陰を見せつつも翁の仮面で覆い隠すかのような構造。八二段は、真意の表現は「また人」に任せ、昔男も有常も翁になりきっている構造。七六段からかぶりはじめた翁の仮面は、八二段で肉付きの仮面となった。そう読んでみたい。

三 宮仕えの悩み

八三〜八七段は、政治的敗者との交情という点で、七七〜八二段から繋がっている（八六段は除く）。ただし、宮仕えが問題になるという、七七〜八二段にはなかったテーマがでてきて、より現実路線へと移行していくことになる。日々の仕事に自由を奪われるという内容は、今までにもなかった。思えば、六五段は象徴的な章段だった。でたためな仕事ぶり。仏神とも無縁。イロゴノミにのみ生きる

デカゲン。六九段にしても、公的な狩の使いのはずが、神をも畏れず、斎宮と密通していた。仕事に背を向け、不良を気取っていた。七七〜八二段の翁関係章段群では現実と折り合いをつけるようになったものの、翁としてふるまうわざらしさにまだ「若き」があった。しかし、八三段以降、翁的幫間性も薄れる。日々の仕事には逆らえない現実に、ポーズをとる余裕もなくなっていくのだ。

まずは八三段。はじめの方の紹介で「馬頭なる翁」としてでてくるが、なぜか詠歌の前では呼称がただの「馬頭」になり、翁としての幫間的言動も見られない。前半部では、帰りたいところを惟喬親王に引き留められそうになり、泣く。後半部では、出家して小野で隠棲する惟喬親王のもとを訪ね、「おほやけごとども」のために長居できないことを嘆く。本筋には幫間的な翁の言動はない。前段までの翁関係章段群とは一線を画している。あるいは、八三段において翁の呼称がはじめの方だけで使われ、本筋で使われないのは、いつまでも翁でありつづけられない現実をあらわしているのではないか。惟喬親王の出家も、翁の慰めなどでは対処しきれない厳しい現実を直視させている、と読める。八三段のはじめまでは、前段までの翁のイメージを引き込み、翁としてふるまってもいられない現実を描く本筋の場面では、翁の呼称を使わない。テーマの転換を印象づけるには効果的だ。八二段で翁の仮面が肉付きとなっただけに、きっちり転換しておきたいところでもある。翁の呼称の背景にそんな計算があったとは思えないが、そう読んでみるとおもしろいだろう。

惟喬親王関係の八二・八三段につづく八四段は、一つとんだ八五段が惟喬親王関係なのに、なぜか惟喬親王関係ではない。かつては、八二・八三段とこの八四段は第一次の成立、八五段は第二次の成立、などといった成立時期の差で説明しようとする時代もあったようだが、成立論はもういいだろう。繰り返し述べてきたように、依拠できるほどの確実性はないし、成立論的に見ることで見えなくなる世界がある。実は、その世界こそがおもしろいのだ。そこには論理的な構成が認められ、既に指摘もある。私が読むとすれば、八二・八三段―八五段のラインに八四段と八六段がそれぞれ副次的に絡んでいる、と読む。たとえば、四四段―四六段のラインに四五段と四七段が絡んで四七段で統合される、六〇段―六二段のラインに六一段と六二段が絡む、といったこれまで読んできた構成と同様に考えるのだ。八四段と八六段は、七七段以来つづいている政治的敗者との交情というテーマからはややそれるため、バイパスとして位置づけた。八四段は内親王というより母親を描いているし、八六段はただの男女の話だ。宮仕えというテーマだけならまだしも、政治的敗者との交情というテーマまで視野に入れると、副次的

な位置づけになる。八四段は、長岡で寂しく暮らす母親が、多忙でなかなか会いに来てくれない昔男に、死別する前に会いたいと詠み、昔男が「千代もといのる人の子のため」に長生きしてほしいと返す。長居できないのが八三段だとすれば、会えないまま死別するかもしれないのが八四段だ。いずれにせよ、八三段にも、八四段にも、そらとぼけた翁の要素は少ない。そんな余裕もない、せっぱつまつた現実と向き合う昔男の姿がある。

八五段。再び惟喬親王関係章段。プロットの進展がある。普段忙しくて参上できない人々が、正月に集まる。雪に降り込められ、昔男が詠む。

思へども身をしわけねば目離れせぬ雪のつもるぞわが心なる

降り込められて帰れなくなったのは本望だ、という内容。帰りがついていた八三段前半部とも呼応するのだろう。惟喬親王も喜んで褒美を与える。驚き悲しむのが八三段。驚き折るのが八四段。八五段は、忙中閑あり。普段の多忙さと参上できない現状を前置きしておいて、たまに会えた時の喜びを描く。ただし、惟喬親王を喜ばせる昔男の歌からは、翁的幫間性というより、しみじみとした情感が感じられる。

八六段は、八四段同様、八二・八三段―八五段のラインに絡む副次的章段だ。内容は、若い頃の昔男と女の話。親の手前、二人は中途半端なたちで交際をやめる。年月が経ち、昔男は、年月が経てば誰でも忘れるものだ、と清算する。そして、「男も女もあひ離れぬ宮仕へになむ出でにける」で終わる。「あひ離れぬ宮仕へ」は、抜け出して会えないほど忙しい宮仕えとしておこつ。八六段は、八五段の交情に水を差す。現実には厳しい。年月は人の心を変え、仕事の忙しさが関係を風化させていく。八五段の「もとの心うしなはでまうでける」人々は、八六段の、

今までに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまぎま年の経ぬれば

という歌のようにはならないのだろうか。前段の内容とあまりにもうまく呼応する歌だ。これ以降登場しなくなる惟喬親王と昔男たちの交情はつづいていくのか、という不安を抱かせる。もちろん、「あひ離れぬ宮仕へ」の解釈しだいで別解もあり得るし、対照的な八六段を以て八五段の固い忠心を逆照射するととてもかまわないだろう。ただ、そう読んだのは、つづく八七段が、兄行平を慰めながらもハッピーエンドを拒んでいるからだ。八五段で慰められて喜ぶうちに終わってしまったえば、一連の暗い色調も厳しい現実路線も崩れてしまう。あくまでも相補的関連性を重視し、八五段の交情に水を差していると読んでおく。

八七段についての詳細な読みは別稿で述べてあるので、そちらを参照されたい。

おおまかに言っておくと、第一部は、不遇を嘆く兄と「なま宮仕へ」の友達を昔男が笑いで一時的に救う。第二部は、救われそうにない暗い将来を予感させる。第三部は、「田舎人」の慰めなどでは晴らせない憂情で締め括る。この八七段が七段以降の政治的敗者を描いた諸章段の締め括りになることも、既にまた別の稿で述べておいた。一連の相補的な繋がりについては、こちらも参照されたい。結論だけ抜き出せば、次のようになる。

派生的な八六段をはさんで七七一八五段の後に位置する八七段は、一連の章段群の〈締め括り〉として機能しなければならぬはずである。となると、当然、ハッピーエンドでは困るわけで、その意味で、八七段第三部が重要になってくる。八七段第三部は虚無感を印象づけ、八七段第一・二部ばかりでなく、七七一八五段に対しても、ハッピーエンドを拒む〈締め括り〉の重責を果たしていると言える。

付け足しておこう。七七一八七段の政治的敗者関係章段群全体の締め括りだけに、前半にあたる翁関係章段群のエッセンスは、第一部の昔男のピエロのような慰めに受け継がれているのだろう。一方、後半にあたる八三〇八七段の宮仕え関係章段群のエッセンスは、変質を余儀なくされている。昔男にとって仕事がプライベートの妨げになる、というのが従来のパターンだったが、今度は、まず、仕事に悩む当事者が昔男ではない。昔男は翁的役割にもどって、代わりに、衛府督である兄行平とその部下の衛府佐たちが悩んでいる。そして、仕事がプライベートの妨げになる、というこれまでの仕事の位置づけも踏襲されない。八七段は蘆屋で物見遊山する話で、親しい者どうし集まっているし、もし彼らが職場にでたとしても部署は近いはずだ。ここで嘆いているのは、官位の低さについて。今までは仕事のために親しい者との交情が妨げられて悩んでいたが、今度は仕事のステータスそのものが悩みの種になっている。いくらなんでも脱仕事人間の昔男が官位について悩むわけにはいかないから、兄や友達がその役を担うことになるのだろう。そもそも、昔男は、ここでは傍観的な翁の立場なのだ。八七段は、七七一八七段の政治的敗者関係章段群全体の締め括りとしての色彩が濃く、八三〇八七段の宮仕え関係章段群締め括りとしては、やはりずれているかもしれない。ただ、先の見えない絶望的なやせなさを印象づける第二・三部は、第一部の翁的な慰めが一時的なものにすぎなかったことをあらわしていて、翁の慰めなどでは対処しきれなかった八三段の惟喬親王の出家と同様な印象を与える。八三〇八七段の宮仕え関係章段群として見る時、冒頭と末尾が呼応する円環性は認められるだろう。

四 消えゆく激越性

七七一八七段を政治的敗者関係章段群とすれば、八八〇九五段はまた別の章段群ということになる。一区切りあって、流れが変わるのだ。内容的には、恋に振ってある。

八八〇九五段のうち、八八〇九三段の構成については、既に渡辺「集成」に指摘がある。

九十一・九十二・九十三の三段は、それぞれ八八八・八八九・九十の三段の、変奏として位置づけ得るものの如くである。

確かにそうした繰り返し構造は認められる。渡辺説を踏まえつつ、八八〇九三段の構成の意味をより深く読んでいこう。便宜的に、八八〇九一段、八九〇九二段、九〇〇九三段に三分して説明する。

まずは、八八〇九一段から。八八段は次のような話。

昔、いと若きにはあらぬ、これかれ友だちども集まりて、月を見て、それがなかにひとり、

おほかたは月をもめでじこれこのつもれば人の老いとなるもの
友達の集まりという点では八七段を受けているが、嘆きの対象は、官位ではなく、〈老い〉そのものになる。九一段も、

昔、月日のゆくをさへ嘆く男、三月つごもりがたに、
をしめども春のかぎりの今日の日の夕暮にさへなりにけるかな
と、やはり、時の流れを嘆いている。

八九〇九二段では、積年の片想いを嘆いている。八九段。

昔、いやしからぬ男、われよりは勝りたる人を思ひかけて、年経ける。
人知れずわれ恋ひ死なばあぢきなくいづれの神になき名おほせむ

九二段。

昔、恋しさに、来つつかへれど、女に消息をだにえせでよめる。

蘆辺漕ぐ棚なし小舟いくそたびゆきかへらむ知る人もなみ

「来つつかへ」とは、繰り返し無駄骨を折っているということ。前段の八八〇九一段では、時の流れを嘆いていた。今度は、その流れる時のなかで、ただむなししく片想いしつづける不如意を嘆く。なんの成果もない、まさにむなししい時の流れなのだ。

九〇〇九三段は、前段の八九〇九二段からプロットの進展があり、相変わらず困難ながらも、やや期待できそうなことが書かれる。九〇段は、「さらば、あす、

もの越しにても」と返事をもらう。が、昔男は、

桜花今日こそかくもほふともあな頼みがたあすの夜のこと

と疑っていて、歌後は「といふ心ばへもあるべし」で終わる。九三段も同じで、せっかくな「すこし頼みぬべきさまにやありけむ」というところまで来ておきながら、

あふなあふな思ひはすべしなぞへなく高きいやしき苦しかりけり

と諦めている。分相応に恋をすべきだ、などと説いてしまふ。歌後の「昔もかかることは、世のことわりにやありけむ」も、九〇段の「といふ心ばへもあるべし」同様、妙にさめている。激越な情念はもはや描かれない。八九・九三段には身分差があり、九〇段では相手が「つれなく、九二段は手紙すらだせない状況にあつたけれども、もし以前の昔男なら、突撃したはずだ。九〇・九三段の諦めモードは、〈老い〉以外のなにもでもない。仕事とかの場面ならともかく、ほかならぬ恋の場面でこうなのだ。あるいは、八八・九一段の〈老い〉への嘆きは、そうした自分の変化を嘆いていたのかもしれない。

八八・九三段の繰り返し構造が終わったところで、九四段がくる。昔男は、かつて通っていた女に、絵を描いてほしいと依頼する。女のもとには新しい男が来ていて、返事が遅れる。それを昔男が皮肉って、

秋の夜は春日わするものなれや霞に霧や千重まざるらむ

と詠む。自分を「春日」・「霞」、新しい男を「秋」・「霧」に譬えている。女は返す。

千々の秋ひとつの春にむかはめや紅葉も花もともにこそ散れ

どうせどちらもあてにならない、とはなんとも達観している。ここらあたりまでくると、昔男のみならず、相手の女までさめてしまふらしい。

最終の九五段は、二条後に仕える女との話。二条后と言えば、八九・九三段の高貴な女は、二条后を想定していいだろう。九〇・九二段の女も、二条后と見ていかもしれない。とすれば、九五段はその後日談としても読める。

昔、二条の後に仕うまつる男ありけり。女の仕うまつるを、つねに見かはして、よばひわたりけり。「いかでもの越しに対面して、おぼつかなく思ひつめたること、すこしはるかきむ」といひければ、女、いとしのびて、もの越しに逢ひにけり。物語などして、男、

彦星に恋はまさりぬ天の河へだつる関をいまはやめてよ

この歌にめでて、逢ひにけり。

わざわざ二条後に仕える女を持ち出してきたところに意味がある。二条后は諦めた。そして、二条後に仕える女に懸想し、逢ってもらえた。べつにハッピーエン

ドでもなんでもない。ただの妥協だ。昔男は現実と折り合いをつけ、こじんまりと分相応に生きる。〈老い〉を受け入れたのだ。

五 結び

一段からこれまで、相補論の深読みを繰り返してきた。毎回感じるのは、伊勢物語は一代記だ、ということ。ごく表面だけ見ても当たり前に見えることなのだが、ここまで内容に踏み込んで昔男の〈生〉の軌跡をなぞってみると、一代記というということがさらに強く実感できる。

今回、昔男は、期待どおり〈老い〉てくれた。はじめは、翁の仮面をかぶって照れ隠ししていた。昔男らしい〈老い〉への入り方だ。次は、宮仕えにプライベートを奪われて悩む。今までには見せなかつた現実的な姿だ。そして、昔男の本分とも言えるべき恋の世界でも、〈老い〉とともにかつての激越性を消失していく。昔男は一人。すべての章段を引きずっていく。〈老い〉るところまではきた。最終の一二五段まであとわずかだ。このまま相補論で走り抜きたい。

なお、本稿を含めた配列順相補論の全シリーズは、愛知教育大学田口研究室のホームページ上で閲覧できる。「早わかり伊勢物語成立論批判」も掲載してある。<http://www.kokugo.aichi-edu.ac.jp/taguchi/taguchi.html> にアクセスを。

注

- 1 「原体験へと帰帰する昔男―伊勢物語一―二〇段に見る〈心〉と〈かたち〉の二元論―」（平安文学論究会編『講座 平安文学論究 第十四輯』平11・10 風間書房）。
- 2 「イロゴノミとして成長する昔男―伊勢物語二―一三七段に見る積層構造―」（愛知教育大学『国語国文学報』平11・3）。
- 3 「連帯」に安息する昔男―伊勢物語三八―四八段に見る〈孤高〉からの脱却―」（愛知教育大学大学院国語研究）平11・3）。
- 4 「復活する昔男―伊勢物語四九―七六段に見る二度の〈再生〉―」（愛知教育大学『研究報告』平12・3）。
- 5 「成立論から相補論へ―新世紀の伊勢物語研究―」（王朝物語研究会編『論叢 伊勢物語―本文と表現―』平11・9 新泉社）。
- 6 「伊勢物語の相補的解釈―その序説としての試論―」（福井貞助編『伊勢物語―諸相と新見―』平7・5 風間書房）。
- 7 「一四段では、歌に「翁さび」と詠まれている。
- 8 「伊勢物語の相補的解釈―一章段内の部分単位での考察―」（愛知教育大学『国語国文学報』平7・3）。
- 9 「伊勢物語の〈モラル〉―美的規範あるいは補償行為としてのミヤビ―」（日本文学）平9・

- 6)。
10 注8論文。
11 注8論文。
12 仁平道明「伊勢物語」惟喬親王章段の方法」(東北大学文学部国文学研究室編「菊田茂男教授退官記念 日本文芸の潮流」平六・一おうふう)。
13 注3論文。
14 注4論文。
15 諸説あるが、渡辺「集成」の説をとった。
16 「伊勢物語八七段の解釈」〔解釈〕平4・6)。
17 注8論文。

付記

本誌前号所載の前稿(注4論文)一二頁下段二九行が一行すべて誤っていた。正しくは次のとおり。訂正されたい。
となむ、いひていき出でたりける。

(平成十二年九月二一日受理)